序に代えて

藤永　太一郎*

平成６年３月３０日、赤坂プリンスホテルで催された日本化学会第６７春季年会懇親会の冒頭において、筆者は1993年度 Robert Boyle Gold Medal をRoyal Society of Chemistry の分析部会長 Newman 博士から受賞しました。

顧みますとこのたびの受賞は、タランタ賞（1983年）、学士院賞（1986年)、日本化学会名誉会員（1990年)、ソ連アカデミー分析化学会議名誉会賞とクルナコフ・メダル（1991年）、環境庁長官賞（1991年)、叙勲（1991年) に引き続く栄誉であり、まことに有難いことであります。しかし、一方では戸惑うことの多い受賞でありました。

先ず、この受賞は全く唐突な通知から始まりました。昨年の夏も終に近づいた頃、王立化学協会秘書 Miss Hutchinson から「当協会は５月１２日の会議で貴下に第８回ボイル賞を授与する決定をした。受諾されるならば９月６日のエジンバラにおける Euroanalysis VIII の開会式の席上で授与したい。旅費と滞在費は協会が負担する。また上記国際会議への登録と行事参加の手続きも当方で行なうから同封のサーキュラーを参考にして申し込んでほしい。尚、５月１３日付の会長公式書簡が貴下に届いていないことを恐れ、私が改めて本状をご自宅宛に送る次第・・・」との書簡が届いたのです。後でわかったことですが、上記文中の公式書簡は前任校に紛れ込んでおりました。普通このような受賞は推薦者の周辺などから漏れてくる前兆があるものですが、今回はそれが皆無でありました。後にこれもわかったことですが、随分以前から、英国化学会の長老某先生が御推薦になっていた由で、しかもその先生は先年亡くなっておられるのです。わかったときにはもう授賞式まで間がない上に、昨夏は肝炎の所為か、すっかり弱っておりました。飛行機の予約と会議の登録も急ぎ行ないましたが、結局医者の勧めもあって出席を取り止めることになったのです。エジンバラでの授与式は筆者不在のまま行なわれ、賞状が送られてくるとともに「日本のしかるべき学会の席をかりてメダルの伝達を行ないたい」と Newman 会長から言ってきました。それには、「貴下の受賞はA. Walsh, I. P. Alimarin, I. M. Kolthoff, H. Malissa, E. Pungor, F. W. McLafferety, E. Stahl に続く８人目になるわけだが、このなかにも病で授賞式に来れなかった前例があり、心配しなくてもよい」とのなぐさめがありました。そのあと１０月に日本分析化学会年会が広島であり、最適と考えられましたが準備が間に合わず、今回の日本化学会春年会での授与ということになりました。これは西島安則会長と中西敦夫事務局長の格別の御芳配がありましたお蔭であります。

授与式では、司会者からボイル賞授与式を行なうに至った経緯の説明があった後、西島（先任）会長が『懐疑の化学者ロバート・ボイル（1627～1691）』について解説された後、本賞の由来について紹介、次いで Newman 会長が筆者の分析化学、特にボ

*（財）海洋化学研究所所長

ルタンメトリーにおける研究業績と授賞理由について述べました。そのあと筆者が紹介されて壇上に上りメダルを頂戴した次第です。メダル受領のあと筆者は、賞の性格に鑑み英語で挨拶しましたが、来賓で出席されていた王立協会会員 West 教授夫妻、Newman 会長など多くの参会者が喜んで下さいました。その概要は次のとおりです。

「1993年度ボイル賞を王立化学協会から受賞したことは大変光栄であり、感謝にたえません。このような素晴らしい賞が戴けるとは予想もしていなかったが、これは多分、日本の化学者が全体として近代分析化学、特にボルタンメトリーの領域に対して大きな貢献をしたことが貴協会によって評価されたものであろうと思います。さて、このメダルをこうして持っていると、メダルから誰かが『化学者よ、懐疑的であれ』といっているのが聞こえてきます。『懐疑的であることが今日ほど大切なときはない』といっているのです。大切なことが最後になりましたが、Newman 会長が親しくメダル伝達のために御来日下さり、また、井口ならびに西島両日本化学会会長がこの立派な式場をご用意下さいましたことに、厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。」

さて、このボイル賞ですが、王立化学協会がこの賞を設定したのには、次のような事情があってのことであると言われています。今世紀半ばまではノーベル化学賞はむしろ分析化学者に多く与えられてきたのですが、戦後次第に同賞は実用評価に傾き Martin (1952年)、Heyrovský (1959年) 以降絶えて受賞者が出なくなりました。特に英国では Walshが原子吸光分析法を創始したとき、何人もが彼の受賞を信じたのですが遂に実現しませんでした。この事が直接の動機となってボイル賞が創設され、先ず彼にこの賞を与えることによって、この賞自体の性格と評価を期したというのです。英国王室も彼に Sir の称号を贈り協力推進したのでした。

このような事情はわが国でも似ておりまして、志方先生にノーベル賞を期待したのですが実現しませんでした。日本化学会賞すら次第に分析化学者の受賞は難しくなり、同様の意図で、日本分析化学会賞が設定されたといってよいと思います。

科学表彰自身もその評価が直ちに得られるとは限らないことは、最近わが国に設定されたいくつかの巨大国際賞をみても明らかです。それにしても、比較にならないほど小規模の当研究所の学術賞でありますが、この賞は『石橋賞』と呼ばれて、石橋雅義先生の御業績を背景にして既に国際的に名の知られる評価が得られるようになっています。御同慶にたえないところであります。